プロティノスの

「有のかなたのものは直知しないこと、および第一義的に直知するものは何か、そして第二義的に直知する者は何かということについて」V-6-(24)

1
或るものが他のものを直知することと、自分で自分を直知することとは区別さえるべきである

後者は<二であること>をすでにかなりよく回避しているが、他方前者は、これもまた欲してはいるのだが、後者ほどにはできないのである

3 なぜなら前者は、見る対象を自分のもとにもってはいるのだが、それにもかかわらず自身はそれとは別のものなのである

5 ところが後者は、実体において分離していないで、自己とともにあって、自己を見ているのである

6 だから、それは一つのものでありつつ、(主体と客体の)両者となるのである

7 それゆえ後者は、もっているので、より多く直治するのであるし、また第一義的に直治するのである

7 なぜなら直知するものは、一にして二であるのでなければならないのだから

8 なぜなら、もし一方それが一つのものではないとすれば、直知するものと直知される者とは別々のものであるだろう

9 とすると、それは第一義的に直治するものではありえないだろう

9 なぜなら、他者を対象として直治するものは、第一義的に直知するものではないだろうから

10 というのは、そのようなものは直治する対象を自己の一部分としてはもっていないわけで、したがってまた、自己を直知することにもならないから

11 またそうでなくて、そのものが、本来の意味で直知するために、自己をもつのだとすれば二つが一つであるだろう

11 かくして、両者はどうしても一つでなければならない

13 またもし他方、それが一つのものではあるが、もはや二つのものでないとすれば、それは直知するための何らの対象をももたないことになるだろう

13 したがって、それは直知するものですらないだろう

13 だから、それが単一であって単一でないことが必要なのである

神が自身を直知するかという設問が矛盾を導くならば、神を否定することができる

14 しかし、もしかすると、魂から上へ昇って行くことによって、それが以上のような性質のものであることを人はより よく理解しうるかも知れない

人間の直知界への上昇の動機となる

魂の上昇によって、劣っていた魂が浄化されるのであるから

15 というのは、このばあいには区別することが容易なので、その二重性を人は比較的容易に見てとることができようから

17 さて、そこでもし人が二重の光を想定して、劣るほうの光を魂として、より清らかな光を魂の直知対象として考え、その後で、見る光も見られる光と等しくなったと想像するならば、もはやその人は何らの差異によってもこの二つの光を区別することができないので、この二つを一つのものとして考えるだろう

20 元来二つであったことは彼に分っているのだが、すでに一つであるものを眼前に見ているのだから

21 以上のようにして、人は直知するものと直知されるものと(の関係)を把握することができるであろう

22 ただし、われわれはこの論において二つのものから一つのものを作り出したのであるが、事実においては逆に、一つの者から二つのものが生じるのである

23 というのは、一つのものが直知することによって、自己を二つのものとするからである

一者が自己を直知することによって、英知を生んだ、というようにも考えられる(この後で否定されるのだが)

その後、一者は静止しているのである

一者は時間には規定されない

24 いやむしろ、このものは直知するゆえに二つの者であり,しかもまた自己を(直知する)ゆえに一つのものなのである

2
さてそこで、もし或るものは第一義的に直知するものであるが、別の或るものはすでにちがってふうに直知するものであるとすrば、第一義的に直知するもののかなたのものは、もはや直知しないであろう

3 なぜなら、かのものが直知するためには、かのものは英知とならねばならないだろうが、しかし英知であるならば、直知対象をもたねばならないし、また第一義的に直知するのであれば、直知対象を自己の内にもたねばならないだろうから

5 なお、直知されるものがすべて、直知するものを自己の内にもっていて直知するということは必然でない

6 なぜなら、かのものは単に直知されるものであるばかりか、直知するものでもあるだろうし、また二つのものであるので、第一のものではないことになるだろうから

8 さらにまた英知にしても、英知は直知対象をもつものであるから、もし純粋に直知対象である実有が存在しないならば

――このものは英知に対しては直知対象であるが、それ自身としては直知するものでもなく、本来の意味での直知対象でもないのだが――

存立しえないであろう

10 というのも、直知されるものは他者にとって(直知対象として)あるのであり、また英知は、それが直知するところの直知対象をつかまえ、捕捉するのでなければ、その直知しようとする作用が空を打つものとなるだろうから

12 なぜなら、英知が直知されるものなしに直知する(作用を)もつことはできないから

13 では、(直知するものは)直知対象をもつ時に完全なものとなるのか

14 いや、それは直知する以前に、自己の有性によって完全でなければならなかったのだ

14 したがって、完全性をそなえたものは、直知される以前にそれ(完全)であるだろう

15 とすると、直知することは、かのものには全然必要でないのだ

16 なぜなら、それ以前にかのものは自分だけで満ち足りているのだから

17 それゆえ、かのものは直知しないだろう

17 かくして、或るものは直知せず、或るものは第一義的に直治し、或るものは第二義的に直知するだろう

18 さらにもし第一位のものが直知するならば、何かがかのものにそなわることになるだろう

18 したがってそれは第一位のものではなくて第二位でもあり、一つではなくてすでに多であり、それが直知する限りのすべてのものであるだろう

20 というのは自己自身だけを直知するのであっても、それは多となるだろうから

3
しかし、もし人びとが、同じものが多であっても何らさしつかえない、と主張するのであれば、この多の下に一が横たわっていることになるだろう

なぜなら、多は一がなければありえないからだ

つまり、多がそこから由来する、あるいはその内にあるところの一が、である

2 あるいは一般に、一があって、これが他のすべてのものよりもまず第一に数えられることが必要である

4 そしてこの一は、それだけで独立して存在すると考えねばならない

5 しかし、この一は他のものたちと一緒にあるのだろいうのならば、人はそれを他のものたちと一緒に束ねて

――とはいえ、それはやはり他のものたちとは異なるのだが――

他のものたちと一緒にある以上は、それを放っておいて、他のものたちの下に横たわるかのものを、もはや他のものと一緒にしてではなく、自立しているものとして求めねばならない

8 なぜなら、他のものたちの内でそれであるものは、かのものに似ていることはできるだろうが、かのものそのものではありえないだろうから

10 否、かのものが他のものたちの内にも見られるためには、かのものは単独で存在していなければならないのだ

11 ただし、かのものの<有る>は他のものたちと合同で成り立っているのだ、とだれかが主張するのであれば、話は別である

13 しかし、このばあいには、かのもの自身も単一なものではないだろうし、また多くのものから成り立つものも存在できないだろう

14 なぜなら、それ自身が単一でありえないものは(自分だけでは)存立しないだろうし、また多くのものから成り立つものも、単一なものがないならば、これもまた存在しないだろうから

15 というのは、何か一つの単一なものがそれ自身で存立しているのでない限り、それぞれのものが単一なものとして存在することはできないので

――そして、これらのうちの何ものもそれ自身では存立しえないとすれば、これらはそもそも有らぬのだから、自己を他者とともにあらしめることもできないので――

どうして多から成り立つものが、すべてのものから成り立つ複合体であえりえようか

21 そのようなものは、ありおしないものから、つまり何かでないものからではなく、全くないものから成り立っているというわけなのだから

23 したがって、もし何かが多であるならば、この多なるものの前に一があるにちがいない

23 だから、直治する者には多がそなわっているとすれば、多でない者の内には、直知する(働き)があってはならないわけだ

24 ところで、これは第一位の者であった

25 したがって、直知する(働き)と英知は、これよりも後の者の内にあることとなるだろう

4
さらに、もし善そのものは単一で無欠乏でなければならぬとすれば、善自身は直知することをも必要としないだろう

そして、かのものが必要としないものは、かのもののもとには存在しないだろう

2 そして、かのものが必要としないものは、かのもののもとには存在しないだろう

2 それにまた、そもそもかのもののもとには、およそ何も存在していないのだから

3 したがって、直知する(働き)は、かのもののもとには存在しないのだ

4 そして、かのものが何ものをも直知しないのは、いかなる他者も存在しないからだ

5 さらに、英知は善そのものとは別のものである

5 なぜなら、英知は善そのものを直知することによって善的であるのだから

7 さらに、あたかも(数)二の内に一と他のものとがあるばあいに、他者とともにあるこの一が一自身であることはできないで、他者とともにある一の前に独立した一があるにちがいないように、

そのようにまた、他者とともに内在する単一なものがあるばあいにも、あのもの(善)が、それ自体で単一なものとして

――他者とともにある単一なものがもつ何ものをも自己の内に含まないで――

存在していなければならない

11 なぜなら、或るもの(A)の内に或るもの(B)がどこからやって来るだろうか

12 かのもの(B)がそこから由来するところのもの(B')が、もっと前に、離れて存在しているのでないならば

13 というのも、単一なものは他者から派生することはできないだろうが、多あるいは二であるものは、それ自身も他者に依存しているにちがいないのだから

15 だから、その一つは光に、次のものは太陽に、そして第三のもの(魂)は光を太陽から供給される月という星にもたとえられるべきである

16 というのは、魂は英知を外からもたらされたものとしてもっており、これが魂を彩って英知的なものにしているのである

17 他方、英知自身は、固有のものとしてもってはいるが、純然たる光であるのではなく、その本質がくまなく、光に照らされているものである

19だが、英知に光を提供するものは、何か他のものであるのではなくて、純然たる光であり、これ(英知)に対して、これが現にそれであるところのものであるための力を提供しているのである

20 とすると、そのようなものそれ自身が、どうして何かを必要とするだろうか

21 というのも、それ自身は、他者の内にあるものと同じものではないのだから

22 なぜなら、他者の内にあるものは、それ自体であるものとは異なるのだから

5
さらに、多様なものは自己自身を求めるだろう

そして自己へ傾くこと、自己を知覚することを求めるだろう

2 他方、全く一であるものが、自己を求めてどこへ行くだろうか

2 いかなるばあいに自己知覚を必要とするだろうか

4 そして、自己知覚を超えているものは、またあらゆる直知をも超えているのである

5 というのも、直治するは、有るという点でも貴重だという点でも、第一のものではなくて、第二位であり、生まれたものである

6 というのは、善がまず存在せしめ、それからこの生じたものを自己のほうへ動かしたのであり、後者は動かされて善を見たのである

9 そしてこれが、直治するということなのだ

9 なぜなら、希求が直知を産み出したのであり、自己とともに直知をも存在せしめたのだから

9 つまり、善を希求して、かのものへ向かって動くことが

10 というのは、見るという働きは、見ることを希求することだからである

12 だから、善それ自身は、何ものをも直知してはならないのである

12 なぜなら、善はそれ自身と別のものではないからである

13 というのは、善と異なるものがかのものを直知する時でも、それが善のようなものとなり、善に似た姿をもつことによって直知するのであり、善のようになり、自己に好ましいものとなり、そしていわば善の外見をもつことによって、直知するからである

16 そして、それが常にそのような状態にあるのであれば、常にそうしているわけだ

17 なぜなら、それは、かのものを直知することにおいて、付帯的に自己を直知するのだから

18 そして、すべてのものの活動は、善へ向かっているのである

6
以上のことが正しく言われているとすれば、善が直知する余地は全くないことになるだろう

なぜなら、直知者にとって、善は別のものでなくてなくてはならないのだから

4 したがって、善は活動しないものである

4 また実際、エネルゲイア(活動)がなぜ活動する必要があるだろうか

4 なぜなら、一般にいかなる活動も、それがさらに活動をもつことはないのだから

5 またたとえ、その他の――他者に向かう――活動には、人びとが活動を帰することが可能であるとしても、その他すべての活動がそれに依存するところの、すべての活動のうちで第一のものだけには、もはやこれには何も付け足さないで、あるがままのもおとして、これを残しておかねばならない

8 とすると、このような、意味での活動は直知ではない

8 なぜなら、それは、それが直知すべきものをもっていないのだから

9 なぜなら、それは、それ自身が第一のものなのだから

10 それにまた、ノエーシス(直知)にしても直知するわけではなくて、直知(作用)をもつものが直知するのだ

10 したがって、この点からしてもやはり、直知するものの内には、二つのものが生じる

11 他方、かのものは、いかなる意味でも二つのものではない

12 そして、人はこのことをもっとはっきりと見てとることができるであろう、もしすべてにおいて、直知するものがこの二重性においてより明瞭に現れているのはどうしてかということを、人が把握するならば

14 われわれは、諸有である限りでの諸有が、それぞれのもの自体が、つまり真実の意味で有るものが、直知される場所に存在すると主張しているが、

その理由は単に、一方が本質において不変のままとどまり、他方の、感覚される限りのものは流動し、とどまらないからというだけではなくて

――というのは、おそらくは感覚される領域にも、とどまるものはあるだろうから――

それよりもむしろ、かの所のものは、自己の<有る>の完成を、自己自身のもとから得ているからである

19 なぜなら、第一義的にウーシアー(実有)と呼ばれるものは、<有る>の影であるはずはなく、充実した<有る>をもっているにちがいない

20 ところで、<有る>が充実するのは、それが<直知する>および<生きている>と<有る>とが一緒にあるわけだ

21 したがって、有るものの内には、<直知する>と生きている>と<有る>とが一緒にあるわけだ

22 したがって、もしそれが有るものであれば、英知でもあるし、また、もし英知であるならば、有るものでもある

23 そして、<直知する>は多であって、一ではない

24 それゆえに、このような性質のものでないものには、必然に、<直知する>ということも帰属しないわけだ

25 さらにまた、われわれが個別に順次見てゆくばあいにも、人間と人間の直知、馬の直知と馬、正義の直知と正義が(一緒に現れるだろう)

26 だから、あらゆるものは二重のものであり、一つが二つであり、また逆に二つが一つに帰するのである

27 他方、かの者は、これらのものには属さないで、これらのそれぞれでもなく、これらすべての二つから成り立つのでもなく、またそもそもいかなる二つでもなくて

――なお、どうして二つであるものが一者から生まれたかは、他の個所で(説明された)――

むしろ実有のかなたにあるものは、また直知のかなたにあるにちがいない

31 なぜなら、かの者はただひとりの者であるので、学ぶべきものを自己のもとにもたないのである

31 したがって、かのものが自分自身を知らないとしても、この点もおかしくはない

32 のみならず、かのものは他のものたちをも知らないにちがいない

33 というのは、かのものは彼らに、彼らを知ることよりも、より価値があり、より偉大なものを恵与するのだから

34 そもそも、かのものは、他のものたちの善であった

35 だから、かのものはむしろ彼らが可能な限りかのものに触れることを終始変わらず許すのである

直知することを許す、と考えてよいのか

許すということは、かのものは意志を持っているのだろうか